

2020 年度
大学院人間文化化学研究科（博士後期課程）

学 生 募 集 要 項

日 程 表

項 目	日 程
出 願 期 間	2020年1月14日（火）～1月21日（火）
試 験 日	2020年2月5日（水）
合 格 発 表	2020年2月17日（月）



公立大学法人

滋賀県立大学

THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

出願にあたっての個人情報の取り扱いについては、下記のとおりとします。

本学が保有する個人情報は、「滋賀県個人情報保護条例」ならびに「公立大学法人滋賀県立大学の保有する個人情報の保護等に関する規程」等により関係法令を遵守し、出願時に大学が取得した氏名、住所その他の個人情報は、下記の目的以外には利用いたしません。

- ①入学者選抜（出願処理、受験票発送、試験実施、成績処理等）、合格通知、入学手続案内、入学者選抜方法の調査・研究等の入試事務および付随する業務
- ②合格者のみ入学に伴う教務事務（学籍、修学指導等）、学生支援事務（健康管理、奨学金申請、後援会等）、授業料等の収納事務および付随する業務

また、上記事務処理の一部を外部に委託し、個人情報を受託業者に提供した場合は、関係法令等により、個人情報の漏えい、滅失またはき損の防止、その他個人情報の適切な管理に必要な措置に万全を期します。

[注意]

- ・問い合わせがあっても、本人以外には志願者の氏名・住所その他の個人情報は一切お知らせできません。
- ・駅、バス停、大学周辺で合否連絡・下宿案内等と称して個人情報を収集していることがありますが、本学ではそのような行為は一切行っていないので注意してください。

目 次

I 人間文化学研究科の概要および入学者の受入方針

1. 研究科の構成	1
2. 教育研究の特色	2
3. 入学者の受入方針（アドミッション・ポリシー）	2

II 入学者の選抜について

1. 専攻別募集人員	4
2. 出願資格	4
3. 選抜方法および試験日程等	5
4. 出願書類	6
(別表) 研究調書等	7
5. 出願手続	8
6. 合格発表	8
7. 注意事項	8

III 入学手続、初年度納付金

1. 入学手続	9
2. 初年度納付金	9

IV 講義等の内容、担当教員および研究内容

1. 講義等の内容	10
2. 担当教員および研究内容	12

I 人間文化学研究科の概要および入学者の受入方針

現代社会では、高度な科学技術の発達によって物質的豊かさが満たされてきた反面、精神的豊かさが失われ、さらに物質的豊かさの内実も必ずしも健康で安全な生活を保障するものとはいえないといえます。

そこで、物心共に豊かな社会を実現するために、伝統文化の再生、新たな文化と生活環境の創造が強く求められています。

このため、人間文化学研究科では、さまざまな地域社会の文化・社会環境および生活空間・生活材・人間関係を人文・社会科学と自然科学の双方から多面的に研究し、それらを総合的に検討する人材を育成し、より高度な学術研究と教育を推進するため、博士前期（修士）課程を引き継いで、本研究科博士後期課程に地域文化学専攻と生活文化学専攻の2専攻を設置しています。

1. 研究科の構成

(1) 地域文化学専攻

本専攻においては、新しい時代に適合する地域社会はいかにあるべきかを考える教育研究を展開します。グローバル化が進む一方で、逆に地方主権の必要性が説かれているなど、時代は変わりつつあります。こうした難しい状況のなかで地域社会はどうあるべきかを考えることが本専攻の目標です。この目標のために本専攻には、日本・歴史文化論研究部門、日本・現代地域論研究部門、国際文化論研究部門を置いています。

日本・歴史文化論研究部門では、近江や日本を中心に、地域社会の構造や文化を歴史的に考察するとともに、隣接地域にも視点を広げ、日本文化との交流や異同性・関連性について教育研究を行います。

日本・現代地域論研究部門では、近江や日本を中心に、隣接地域にも視点を広げながら、地域社会の現状を、社会学・地理学・民俗学・地域計画学・保存修景学・文化人類学などの調査分析手法を用いて、背景にある地域社会の構造や社会意識を明らかにしつつ、地域活性化をはかるための方法を探ることを目的とした教育研究を行います。

国際文化論研究部門では、グローバル化というマクロ的状況の中で展開されている、アジア及び欧米地域の言語・文化・社会にかかる諸現象を、文化人類学・近現代史・言語学・文学などの学問的手法を駆使して教育研究を行います。さらにこうした研究成果を世界に向けて情報発信するための教育を推進していきます。

(2) 生活文化学専攻

本専攻においては、生活科学、人間科学の立場からライフスタイルと人間関係の問題を対象とする高度な教育研究を行います。すなわち、人間のライフサイクルの全体を通して、生活と社会との関わりを、生活デザイン、健康と栄養、人間関係の諸領域にわたって綿密に再検討し、真に充足された健康で快適な生活文化と生活環境を見いだすための教育研究を行います。このため、本専攻内に、生活デザイン論研究部門、健康栄養論研究部門、人間関係論研究部門を置

いています。

生活デザイン論研究部門は、生活の中でのデザインを探究し、健全なライフスタイルと生活環境をデザインすることを目的とする教育研究を、学際的な立場から展開し、新しい生活デザインの構築に努めます。

健康栄養論研究部門は、健康と栄養に関する基礎から応用までの栄養科学にかかわる諸問題に関して、幅広い視点から理論的・実証的研究を行います。

人間関係論研究部門は、社会的に望まれる生活環境の中での人間関係の構造的・機能的特性を解明するために、人間の発達と形成、言語やコミュニケーションのメカニズム、人間行動の機構、現代社会の人間関係や比較文化などに関し、教育学、心理学、社会学、コミュニケーション論などの立場から学際的に追究する教育研究を行います。

2. 教育研究の特色

- (1) 本研究科博士後期課程は、それぞれの専門部門の研究を進めるとともに、「地域と生活に根ざした視点」を共有し、研究部門間の教育研究にわたる学際的連携を進めるとともに、学内外の共同研究プロジェクトに参加し、総合的な研究を展開します。とくに地域文化学専攻では、環琵琶湖からアジアに広がる地域学を学内外と共同で学際的に展開します。
- (2) 学際性と独創性を高めるために、学生は他研究科教員を含む教員、協力関係にある研究機関のスタッフなどの指導を受けることができます。ただし、最終的な指導責任は学生の所属する専攻の主任指導教員が負います。
- (3) 大学院教育に広がりを持たせるため、外国人留学生の受入れ、外国を含む他大学院との連携をも進めます。

3. 入学者の受入方針（アドミッション・ポリシー）

（地域文化学専攻）

それまでの大学、大学院における研究を踏まえた上で、さらに研鑽し、博士論文として結実させる能力、識見を有した学生を求めています。

（生活文化学専攻）

生活科学、人間科学の立場からライフスタイルと人間関係の問題を対象とする高度な教育研究を行います。すなわち、人間のライフサイクル全体を通して、生活と社会との関わりを、生活デザイン、健康と栄養、人間関係の諸領域にわたって綿密に再検討し、真に充足された健康で快適な生活文化と生活環境を見いだすための教育研究を行います。このために、生活デザイン論、健康栄養論、人間関係論の3研究部門それぞれにおいて、必要とされる当該分野の基礎知識、思考力、語学力および研究資質を有する学生を求めています。

生活デザイン論研究部門は、生活環境とその形成について学際的な立場から探究し、新たな生活デザイン論の構築をめざす教育研究を展開します。このために、デザインの少なくとも一領域に関する専門的知識を持ち、研究の能力と実績を有する学生を求めています。

健康栄養論研究部門は、人が健康で豊かな生活を営むために、食品機能や生体における栄養素の代謝や生体利用、運動生理の仕組みを探究し、疾病の予防や治療、健康の維持・増進を目的とした実践的な教育研究を展開しています。このことから、健康・栄養に関する十分な知識、実践の科学としての応用力と思考力並びに英語読解力（留学生の場合は日本語能力）を持ち、健康に関する栄養学および運動生理学を探究しようとする学生を求めています。

人間関係論研究部門は、社会的に望まれる生活環境の中での人間関係の構造的・機能的特性を解明するために、人間の発達と形成、言語やコミュニケーションのメカニズム、人間行動の機構、現代社会の人間関係や比較文化などに関し、心理学、社会学、教育学、コミュニケーション論などの立場から学際的に追究する教育研究を行います。このために、当該分野に関する専門的知識と研究資質を有する学生を求めています。

Ⅱ 入学者の選抜について

1. 専攻別募集人員

専攻	部 門	募 集 人 員※
地域文化学専攻	日本・歴史文化論研究部門 日本・現代地域論研究部門 国際文化論研究部門	3 人
生活文化学専攻	生活デザイン論研究部門 健康栄養論研究部門 人間関係論研究部門	2 人

※ 募集において、「一般」・「社会人」・「外国人」の区別はしません。

2. 出願資格

次の(1)から(7)のいずれかに該当する者

- (1) 修士の学位を有する者および2020年3月31日までに取得見込みの者(注1)(注2)(注5)
- (2) 外国において、修士の学位に相当する学位を授与された者および2020年3月31日までに授与される見込みのある者(注1)(注2)(注5)
- (3) 外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修し、修士の学位に相当する学位を授与された者および2020年3月31日までに授与される見込みのある者(注1)(注2)(注5)
- (4) 我が国において、外国の大学院の課程を有するものとして当該外国の学校教育制度において位置付けられた教育施設であって、文部科学大臣が別に指定するものの当該課程を修了し、修士の学位または専門職学位に相当する学位を授与された者および2020年3月修了見込みの者(注5)
- (5) 文部科学大臣の指定した者 [平成元年文部省告示第118号] (注3)(注5)
- (6) 本研究科において、個別の入学資格審査により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者で、2020年3月31日までに24歳に達するもの(注4)(注5)
- (7) 外国人の場合は、上記(1)～(6)のいずれかの資格を持ち、かつ、日本語を理解できる者

(注1) 修士の学位の種類は問いません。

(注2) 出願資格(1),(2),(3)のうち、修士の学位(または修士に相当する学位)を取得見込みで出願する場合、2020年3月31日までに取得できないことが確定した場合には、合格しても入学資格を失うことになります。

(注3) 出願資格(5)に該当する者とは、次の①または②に該当し、本研究科において、当該研究の成果等により、修士の学位を有する者と同等以上の学力があると認められた者をいいます。

①大学を卒業し、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者

②外国において学校教育における16年の課程を修了した後、または外国の学校が行う通信教育における授業科目を我が国において履修することにより当該外国の学校教育における16年の課程を修了

した後、大学、研究所等において、2年以上研究に従事した者
 (注4) 出願資格(6)に該当する者には、大学を卒業した者のほか、短期大学、高等専門学校、専修学校、各種学校の卒業者や外国大学日本校、外国人学校等の修了者等も含まれます。
 (注5) 2020年10月入学を希望する者は、2020年3月31日までを2020年9月30日に読み替えます。

出願資格(5)、(6)で出願しようとする者は、出願資格の事前審査を行うので、あらかじめ本学教務課へ申し出て、次の書類を提出してください。

提出書類：①出願資格認定申請書(様式I票)
 ②出願書類一式(F票および入学検定料を除く。)

提出先等：提出期間 2019年12月19日(木)～12月26日(木)まで

提出場所 滋賀県立大学教務課

審査の結果は、2020年1月9日(木)までに本人あてに通知しますので、出願資格を認定された者は、出願書類の受付期間内にF票および入学検定料を追加提出・振込してください。
 ※持参による受付時間は、午前9時から午前11時30分および午後0時30分から午後5時までとします。(土日祝日を除く。)

3. 選抜方法および試験日程等

修士論文等の審査および面接の結果を総合して選考します。

試 験 日：2020年2月5日(水)

試 験 場：本学人間文化学部棟

専 攻	試験科目	試験時間	出 題 の 内 容
地域文化学専攻	面 接	10:00～	修士学位論文および研究調書等に基づいた専門に関する設問を含む。
生活文化学専攻	面 接	10:00～	専門に関する設問を含む。

4. 出願書類

出願に必要な書類		作成方法
A票	入学(進学)志願票	本学所定の様式によること。 *学業成績証明書等に記載された氏名と異なる場合は、氏名を変更したことを証明する書類をあわせて提出してください。
B票	履 歴 書	本学所定の様式によること。
修士学位論文		修士の学位論文またはこれに代わるものを1部印刷およびPDFデータをCD等で提出すること ※1
研究調書等		別表(p.7)に記載の「研究・実務経験調書(J-1票)」、「業績一覧書(J-2票)および論文等」、「研究計画書(J-3票)」
大学院学業成績証明書		◆出願資格(1)(2)(3)(4)該当者◆ 出身大学院の学長または研究科長が作成し、厳封したもの [ただし、本学を2019年度に修了見込で進学を志望する者は提出不要]
大学等学業成績証明書		◆出願資格(5)(6)該当者◆ 最終学歴の大学等の長が作成し、厳封したもの
修士(博士前期)課程修了(見込)証明書		◆出願資格(1)(2)(3)(4)該当者◆ 出身大学院所定のもの [ただし、本学を2019年度に修了見込で進学を志望する者は提出不要]
大学等卒業証明書		◆出願資格(5)(6)該当者◆ 最終学歴の大学等所定のもの
学位授与証明書または学位授与申請に係る証明書		学校教育法第104条第4項の規定による学位授与の場合に提出する。
住民票の写し(外国人のみ)		市区町村長が発行したもので、在留資格を明記したもの(原本を提出すること。)
C票	住 所 票	可否の通知書等送付先の住所を記入すること。
D票	受 験 票	縦4cm×横3cmの写真(上半身、無帽、正面向き、背景なし、出願前3か月以内に撮影したもの)を写真貼付欄に貼付すること(D票・E票とも同じ写真であること)。
E票	写 真 票	
F票	入学検定料振込確認票	所定欄に収納印を受けた「入学検定料振込金受領証明書」を貼付すること。*日本に居住していない者にとっては、払込方法を指示するので、事前にインターネットのE-mailまたは郵便で教務課まで問い合わせること。
G票	受験票返送用封筒	受験票返送先の住所、氏名、郵便番号を明記し、82円分の切手を貼付すること。*日本に居住していない者にとっては、航空便書状料金(20g)に速達料金を加えた「国際返信用切手券」を同封すること。
H票	出願書類提出用封筒	「志望研究科・専攻・部門」欄、「志願者」欄に必要な事項を記入すること。
I票	出願資格認定申請書	出願資格(5)、(6)で出願しようとする者は、本様式に必要な事項を記入し、出願に先立って所定の期間内に提出すること。
入学検定料 30,000円 ・入学検定料は本学所定の「入学検定料振込依頼書」により、出願受付期間の1週間前から出願受付最終日までの間に、指定の金融機関に振り込んでください。なお、ATM(現金自動預け払い機)は利用できません。 ・振り込み後、「入学検定料振込金受取書」および「入学検定料振込金受領証明書」を受け取り、収納印があることを確認してください。なお、収納印を受けた「入学検定料振込金受領証明書」は、入学検定料振込確認票の所定欄に貼付してください。		

※1 <地域文化学専攻の場合>内容は、志望専門分野に関するものであること。修士学位論文が志望専門分野に関わらない内容の場合は、これに代わる志望専門分野に関する論文を提出すること(いずれの場合も日本語で、字数は24000字以上)。なお、外国語(英語を含む)で書かれた論文の場合は、原本と日本語の概要(5000字程度)を提出すること。

(注1) A票～I票および「入学検定料振込依頼書」の各書類は、本冊子に添付されています。

(注2) 英語以外の外国語で書かれた書類については、日本語訳または英語訳を添付してください。

(別 表)

研 究 調 書 等

研究調書等	摘 要
<p>1 研究・実務経験調書 (J - 1 票)</p> <p>これまでの研究の概要または実務経験・職務上の業績をまとめたもの。</p> <p>研究業績、実務経験・職務上の業績の両方にわたってもよい。</p>	<p>和文 2000 字以内、あるいは英文 600 語以内 (A 4 縦長・横書き)</p>
<p>2 業績一覧書 (J - 2 票) および論文等</p> <p>学位論文・学術論文・学会発表・特許などの研究業績、および製品開発・システム開発・プログラム開発・書誌作成・プロジェクトへの参加など実務上の業績のリスト (共同開発の場合には何を分担したかを付記すること)。</p> <p>学位論文および主要学術論文は、別刷 (または写し) を各 1 部添付すること。</p>	<p>学術論文については、著者名 (共著者名を含む)、論文の表題、学協会誌名、巻、最初と最後のページ、発表年月 (西暦) を記入すること。英語以外の外国語で書かれた論文については、日本語または英語の概要を付けること (別紙 [A 4 縦長・横書き] の添付可)。ただし、地域文化学専攻については、外国語 (英語を含む) で書かれた<u>修士学位論文</u>の概要は日本語とする (6 ページの※1 を参照)。</p> <p>学会発表については、発表者名 (共同発表者名を含む)、発表の表題、発表学会名、発表年月 (西暦) を記入すること。</p> <p>プロジェクトについては、プロジェクト名、期間、プロジェクトの概要、自分の役割を記入すること。</p>
<p>3 研究計画書 (J - 3 票)</p> <p>研究を希望する研究テーマについて、研究計画をまとめたもの。</p>	<p><地域文化学専攻></p> <p>和文あるいは英文で 4 ページ程度 (A 4 縦長・横書き)。</p> <p>なお、次の項目にしたがって具体的に書くこと。</p> <ol style="list-style-type: none">(1) 研究の背景(2) 研究の目的、内容(3) 研究の特色、独創的な点(4) 年次計画 (1 年目、2 年目、3 年目) <p><生活文化学専攻></p> <p>和文 2000 字以内、あるいは英文 600 語以内 (A 4 縦長・横書き)</p>

(注) J - 1 ~ 3 票の各書類は、本冊子に添付されています。

5. 出願手続

(1) 受付期間 2020年1月14日(火)～1月21日(火)まで(必着)

出願にあたっては出願書類提出用封筒〔H票〕を用い、郵送または直接持参してください。

なお、郵送による場合は必ず書留速達扱いとし、受付期間最終日必着とします。また、持参による受付時間は午前9時から午前11時30分および午後0時30分から午後5時までとします。(土日を除く。)

(2) 願書提出先 〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500

滋賀県立大学 教務課 TEL: 0749-28-8217・8243

E-mail:nyushi@office.usp.ac.jp

※日本に在留していない者で、受験のための在留資格「短期滞在」の取得に日時を要する場合は、事前に上記まで相談してください。

6. 合格発表

2020年2月17日(月) 午前9時

事務局前の掲示板に合格者の受験番号を掲示するとともに、合格者に合格通知書を送付します。

また、合格者の受験番号を大学ホームページ (<http://www.usp.ac.jp>) に掲載します。なお、電話等による可否の問い合わせには応じません。

7. 注意事項

- (1) 一度受付をした出願書類および入学検定料は、理由のいかんを問わず返還しません。
- (2) 出願期間を過ぎて到着したものは受け付けませんので、郵送に関しては所要日数を十分に考慮して発送してください。
- (3) 入学を許可した後であっても、出願書類の記載と相違する事実が発見された場合には、入学を取り消すことがあります。
- (4) 出願受付後には出願事項の変更は認めません。ただし、氏名、住所、電話番号に変更があった場合には、下記まで連絡してください。
- (5) 心身に障がい(学校教育法施行令第22条の3に定める障がいの程度)がある入学志願者は、受験上および修学上特別の配慮を必要とすることがありますので、2019年12月26日(木) 午後5時までに連絡し、相談してください。
- (6) 外国人は、入学時まで、「出入国管理及び難民認定法(昭和26年政令第319号)」において大学院入学に支障のない在留資格の取得が必要となります。在留資格の取得ができない場合は、入学が許可されないことがあります。
- (7) 志願者は、出願に際して志望研究部門および担当教員を決定するに当たり、事前に希望する教員に直接連絡をとることが望ましいです。
- (8) その他不明な点は、下記まで問い合わせてください。

《問い合わせ先》

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500

滋賀県立大学 教務課

TEL 0749-28-8217・8243

E-mail:nyushi@office.usp.ac.jp

Ⅲ 入学手続、初年度納付金

1. 入学手続

- (1) 入学手続期間 2020年3月13日(金)～3月23日(月) (必着)
入学手続に必要な書類は、合格通知書に同封して郵送します。

(2) 入学手続先

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500
滋賀県立大学 教務課 ☎0749-28-8217・8243

(3) 入学手続上の注意事項

- ① 期間内に手続を完了しなかった者については、入学を辞退したものとして取り扱います。
② 一度受付をした入学手続書類および入学料は、理由のいかんを問わず返還しません。

2. 初年度納付金

- (1) 入学料 ① 滋賀県内に住所を有する者 282,000円
② その他の者 423,000円

(注1) 滋賀県内に住所を有する者とは、次のいずれかに該当する者のことであり、「住民票の写し」の提出が必要です。

ア 入学の日の1年前(2019年4月1日、但し10月入学は10月1日)から引き続き滋賀県内に住所を有する者

イ 入学の日の1年前(2019年4月1日、但し10月入学は10月1日)から引き続き滋賀県内に配偶者または1親等の親族(生計を一にする者に限る。)が住所を有する者

(注2) 本学大学院博士前期課程修了見込みの者で、引き続き博士後期課程に進学する者については、入学料は不要です。

- (2) 授業料 ① 年額 535,800円

(注) 2019年度の額であり、改定されることがあります。

なお、在学中に授業料が改定された場合には、改定後の授業料が適用されます。

- ② 納付方法

前期(納付期限4月30日)、後期(同10月31日)の2回の分納です。

IV 講義等の内容、担当教員および研究内容

1. 講義等の内容（変更される場合がある。）

(1) 地域文化学専攻博士後期課程

授業科目名	講義等の内容
日本・歴史文化論 特別演習	専門分野・隣接分野について、日本あるいは隣接地域・各時代を扱った研究論文等を精読し、基礎理論、方法論および先行研究の成果に関する理解を深める。
日本・歴史文化論 特別研究	日本あるいは隣接地域における地域文化の領域について、歴史的・国際的視点に立脚し、理論的・応用的な研究課題を設定させ、分析方法、調査方法、研究成果のまとめ方などについて高度な指導を行う。
日本・現代地域論 特別演習	専門分野・隣接分野について、日本あるいは隣接地域・各時代を扱った論文や調査報告書を精読する。また、現地調査を実施させ、その際に作成したフィールドノートをもとに討議する。
日本・現代地域論 特別研究	日本あるいは隣接地域における現地調査などをもとにしながら、地域社会の形成、発展、現状を分析し、実態解明を図る。また、その成果から、対象地域の活性化をはかる方法も検討させながら、博士論文にまとめるよう指導する。
国際文化論特別演習	アジアや欧米の言語・社会・文化に関する文献を精読すると同時に、討論を通じて批判的に検討する力を養う。また学生は、複数の部門教員の参加の下で、フィールドワークや文献調査による研究発表を行う。
国際文化論特別研究	アジアや欧米の言語・社会・文化に関する諸現象を、文化人類学や歴史学、言語学・文学の理論・方法論を駆使して解明していく。その際、博士論文以外に積極的に学会発表や論文執筆を行うよう指導していく。さらに外国語による発表や論文執筆も推進していくものとする。
研究方法特論	学生が幅広い視野の元に研究をすすめていけるよう、関連する研究領域の研究方法について、主たる指導教員以外からも指導を受けられる機会をつくる。学生は研究テーマの追求にあたって、それに関連する領域を担当する複数の教員（主たる指導教員以外の教員）の研究室を訪問し、研究テーマ、研究方法、研究倫理、そのほか研究者として必要な技法や理論的知識について個別指導を受ける。
リサーチ・ワークショップ	学生の研究を個々の専門分野の垣根を越えて組織的・多面的に指導・支援するために、履修者全員と指導担当教員全員が出席するワークショップを年2回ほど開催する。履修者は事前に報告要旨を提出し、その上で自らの研究計画・研究報告を発表し、質疑を受ける。ワークショップ終了後、質疑応答の結果を踏まえて改善した研究計画書および論文執筆計画書をまとめる。

(2) 生活文化学専攻博士後期課程

授業科目名	講義等の内容
生活デザイン論 特別演習	生活デザイン論のなかでインテリア、住居、都市・地域を含む集住デザイン、道具デザイン、服飾デザインの各分野において、最新の研究成果である各種文献を読み、紹介し、そして討論し、それらの分野の知見と研究動向を把握させ、研究方法を更に修得させ、問題の所在や新たな研究の方向を洞察する能力を養成する。
生活デザイン論 特別研究	住居デザイン、都市・地域デザイン、道具デザインおよび服飾デザインなど生活デザインの分野における理論的分野並びにこれらの横断的な分野に関するテーマについて、複数の教員によって指導し、その成果を博士論文にまとめさせる。
健康栄養論特別演習	健康栄養論に関する知見の進歩・国際比較を考慮に入れて、最新の研究論文・総説を紹介させ、質問と討論を行う。また、研究動向や方法に関する情報を深め、研究の方向性を洞察できる能力を学習させ、研究者として独り立ちできる能力を身につけさせる。
健康栄養論特別研究	生化学、栄養学、生理学などの幅広い健康・栄養科学領域から、健康に関する諸問題を総合的に学際的に捕らえさせる。これらの健康栄養に関する諸研究分野から、学生が選択したテーマについて複数の教員によって研究指導を行い、その成果を博士論文にまとめさせる。
人間関係論特別演習	人間関係論の研究部門に関する諸問題を演習形式で指導する。文献研究、行動観察、心理実験、社会調査などによって、学生各自が研究テーマを追究し、同時にその方法論について学べるよう指導する。
人間関係論特別研究	人間関係論の立場から人間関係の基本的構造とその機能的特性を追究し、社会における望ましい人間関係のあり方を学際的に解明するための研究指導を行う。各自が研究テーマを設定し、それぞれの課題について理論的・実証的に研究した成果を博士論文にまとめるよう指導する。
研究方法特論	学生が幅広い視野の元に研究をすすめていけるよう、関連する研究領域の研究手法について、主たる指導教員以外からも指導を受けられる機会をつくる。学生は研究テーマの追求にあたって、それに関連する領域を担当する複数の教員（主たる指導教員以外の教員）の研究室を訪問し、研究テーマ、研究方法、研究倫理、そのほか研究者として必要な技法や理論的知識について個別指導を受ける。
リサーチ・ワークショップ（RWS）	学生の研究を個々の専門分野の垣根を越えて組織的・多面的に指導・支援するために、履修者全員と指導担当教員全員が出席するワークショップを年2回ほど開催する。履修者は事前に報告要旨を提出し、その上で自らの研究計画・研究報告を発表し、質疑を受ける。ワークショップ終了後、質疑応答の結果を踏まえて改善した研究計画書および論文執筆計画書をまとめる。

2. 担当教員および研究内容

(1) 地域文化学専攻博士後期課程

【日本・歴史文化論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
教授	ナカイ ヒトシ 中井 均	日本考古学	日本考古学A 日本考古学B	考古学、とりわけ中世考古学を研究している。考古学は時代を限定するものではなく、歴史時代にもきわめて有効である。研究の中心は城館遺跡である。中世の日本列島には数多くの城館が築かれており、中世を考えるうえでは最も重要な遺跡である。この城館遺跡を分布や規模をはじめ、遺構からは、石垣、礎石建物より、遺物からは陶磁器、土師器、瓦などより分析をおこなっている。また、最近では近世大名の墓所の構造に大名の権力構造が認められる点に関心を持っている。
教授	カメイ ワカナ 亀井 若菜	日本美術史	美術史特論A 美術史特論B	中世の絵巻を主な研究対象としている。絵の中には、絵を作った人、作らせた人の願望や欲望、価値観が表されていると考え、絵の意味や機能を、絵が作られた社会的歴史的状况から考えている。特に女性や土地を描く絵を対象とし、それが誰の視線を通した表象であり、そこにどのような権力が作用しているのかを研究している。また日本美術史という学問・言説の体系の成り立ちやその語りに対しても考察を行っている。主著は『表象としての美術、言説としての美術史—将軍足利義晴と土佐光茂の絵画』。
教授	キョウラク マホコ 京 楽 真帆子	日本古代史	女性史・ジェンダー論A 女性史・ジェンダー論B	平安時代の平安京を主たるフィールドとして、貴族社会の生活を研究している。貴族の交友関係、居住形態、その住居の構造などを日本文学・考古学などの他分野の成果も取り入れながら分析している。さらに、平安期の家族・親族構造や婚姻・出産儀礼についての分析など、女性史・ジェンダー史から平安社会を解く研究も行っている。
教授	アスマ サチヨ 東 幸代	日本近世史	環琵琶湖地域論A 環琵琶湖地域論B	日本近世が現代日本の体質形成に大きな影響力をもったとする立場から、近世の生産・流通構造、支配構造、民衆生活等について検討している。特に、漁業を中心とする諸産業の史的特質や、琵琶湖などの自然を利用した幕藩領主層の民衆支配の特質に関心をもっている。また、地域に残る古文書の活用・保存にも強い関心がある。
准教授	キム ウ ダイ 金 宇 大	世界遺産学	アジア考古学A アジア考古学B	古代東アジアにおける地域間関係、特に古墳時代における日本列島と朝鮮半島諸地域の相互交流の実態について、考古学的な視点から明らかにすることが研究の目標である。主に、両地域の古墳から出土する副葬品、特に貴金属を用いて装飾した装身具や刀剣を分析対象とし、製品や技術がどのように伝わってきたのかを検討している。加えて、こうした過去の事実を今に伝える種々の遺跡・遺物そのものに対し、その価値をいかに評価すべきかについても関心を寄せている。

【日本・現代地域論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
教授	イチカワ ヒデユキ 市川 秀之	日本民俗学	日本生活文化論	近畿地方の村落や都市をフィールドとした歴史民俗学的な研究を行っている。主たる研究テーマは村落空間論、農業水利と村落社会との関係、小都市における民俗文化、近世後期以降の民俗の創出と改変など。既存の民俗学的分類であれば村制、生業、墓制などの領域を中心とした研究であるが、フィールドワークを通して特定地域における民俗の全体像に迫ることを目的としている。また最近では民俗学の「学」としての形成過程にも関心を持ち、宮座や墓制などの分野で研究史の見直しを行っている。
教授	イシカワ シンジ 石川 慎治	保存修景 集落研究	環琵琶湖保存修景計画論 地域文化遺産調査・情報論	伝統的な建造物などで構成される町なみや集落（伝統的建造物群保存地区や文化的景観など）に関する研究を行い、地域文化財としての町なみや集落景観における保全・継承のあり方について模索している。また、倒壊・解体していたり、絵図などの史料などでしか状況がわからないような現存しない建造物について、CADなどを用いながら復元・検討を行い、その建造物や周辺環境を含めた当時の歴史的景観を探っている。

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
准教授	タケダ シュンスケ 武田 俊輔	社会学 文化研究	環琵琶湖地域論A 環琵琶湖地域論B 社会学特論A 社会学特論B	近現代日本におけるナショナリズム・メディア・文化について、社会学の立場から研究を行っている。具体的には、①地域社会における民謡や民俗芸能が地域社会の近代化や観光、地域おこしといった文脈の中で変容していくプロセスを分析することを通じての、郷土意識と国民意識およびその両者の関係性の変容についての研究、②近現代日本における印刷メディア・音声メディアとそれともなう音声性／書記性をめぐるメディアの編成に関する研究、③近現代日本におけるメディアと公共性に関する研究を行っている。
准教授	ツカモト レイジ 塚本 礼仁	人文地理学 地域産業研究	地域産業論A 地域産業論B	主に農林水産物の「産地」を対象とし、形成プロセス、産地機能の維持基盤、成長・衰退の要因、変質の仕組みを探るとともに、持続的発展の可能性についても考察している。具体的な研究素材は、日本人の独特かつ伝統的な魚食文化のもとで食されてきたウナギを作る養鰻産地であり①生産者・組合・流通業者・加工業者などが形作る「産地社会」の実態をフィールドワークによって描き出すこと、②フードシステム（「食」をめぐる社会・経済・政治・文化的な環境）と水産養殖産地との連結構造を解明することを重視してきた。また今後は、琵琶湖漁業・養殖業や滋賀県の淡水魚食文化についても分析を進めたい。
准教授	ハギハラ カズ 萩原 和	地域計画学	地域計画特論	近畿・東海地方を主なフィールドとして、都市および農村の地域計画学の観点から研究に取り組んでいる。具体的には、まちづくり人材育成（行政機関、NPO等）における支援方策のあり方に関する研究、住民自治組織を対象とした社会ネットワーク視点による組織デザインに関する研究、公共的空間・施設（公園、駅前広場、商店街等）の運営管理に関する研究などを、主たるテーマとして研究を進めている。
講師	ヨコタ サチ子 横田 祥子	文化人類学 地域研究	現代中国特論A 現代中国特論B	再生産労働の国際分業化に伴う、女性の国際結婚・労働移住と、家族、コミュニティへのインパクトについて、人類学的な研究を行っている。具体的には、インドネシアから中国系女性が台湾、香港、マレーシアなどへ送出される現象に着目し、上記複数地域での調査を通じて、長期にわたり女性が送出されるメカニズムの解明に努めている。また、女性の移動に伴う子供の移動経験についても、研究を行っている。女性の国際移動は文化人類学、社会人類学では伝統的専門領域ではないが、移動の時代における女性と家族の生を描く重要性を認識し、それを目的としている。

【国際文化論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
教授	タナモト シロウ 棚瀬 慈 郎	チベット学 文化人類学	国際文化論特講C	最近、主に以下の二つのテーマについて研究している。 1. ヒマラヤ地域におけるチベット系社会についての人類学的研究—インドのH.P.ラホール渓谷において、長期的なフィールドワークをおこなっている。 2. チベットの宗教文化の研究—チベット仏教の、特にニンマ派と呼ばれる宗派に属するヨーガ行者達の行動と、その社会的影響に関する研究。
教授	ゴ 吳 リョウ 凌 非	言語学 中国語学 言語処理	国際文化論特講H	主として言語の形式化について様々な視点から論じていく。具体的には、以下のとおりである。 1. 文法学者フィルモアのS=P+M(Sは文、Pは命題、Mはモダリティ)という式を中心に関連諸説を展開していく。特にモダリティの形式化は言語処理の分野でも注目される課題の1つである。 2. 動詞の分類に関する研究 3. ことばによる点事象と線事象の描写の仕組みに関する研究 4. 中国語および中国語教育に関する研究
教授	ボルジギン・ ブレンサイン	社会史 中国東北・ 内モンゴル地域論	国際文化論特講D	主な研究内容は以下の通りである。 1. 基本的にはモンゴル全体を視野に入れているが、特に内モンゴル若しくは中国領モンゴル族の歴史と社会変遷を中心としている。それに関連して中国の少数民族問題も視野に入れて研究している。 2. 清末以後における中国東北地域の諸民族の歴史と社会問題、又は満州国期前後の問題にも取り組んでいる。 3. 研究手法は史(資)料の収集、分析と対象地域におけるフィールドワークの結果を結合させることである。
准教授	シマムラ イッセイ 島村 一 平	文化人類学 モンゴル研究	国際文化論特講E	文化人類学理論を駆使しながらも、フィールドワークを行い以下のような研究を行っている。 1. モンゴルにおけるシャーマニズムとエスニシティに関する研究 2. グローカルに展開されるモンゴル仏教実践に関する研究 3. チンギス・ハーン表象をめぐる国際比較研究 4. モンゴルにおける地下資源開発と社会変容に関する研究 5. ヒップホップを巡る国境を越えた「声の共同性」に関する研究

(2) 生活文化学専攻博士後期課程

【生活デザイン論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
教授	ミヤモトマサコ 宮本 雅子	建築色彩 インテリア計画 居住環境	住環境デザイン特論A	高齢社会における快適な居住環境を整えるための条件について調査および実験を行い、検討を進めている。主に、視環境に関わる実験的研究を行っており、「高齢社会における室内色彩計画に関する研究」「夜間の住宅照明環境実態と日本人の生活スタイル・省エネルギー意識から今後の住宅照明について検討」などがある。また、「高齢者のための居住空間に関する研究」など実態と居住者の意識をとらえた研究も行っている。
教授	モリシタ 森下 あおい	服飾デザイン 服飾造形学	服飾デザイン特論A	服飾デザインは物的、用途的条件のほか、人間が生活していく中で多様な文化、社会的条件と人間の心の中に働く意識によって生み出されている。こうした服飾デザインのもつ特性に注目し、その構成要素を明らかにすることを試みながら、服飾デザインと人間の間を介する創造的な感性特性の解明を、デザイン画に着目した研究として行っている。
准教授	ヨコタ ナオミ 横田 尚美	服飾文化史	服飾デザイン特論B	19世紀から現在までの西洋服装史と日本和洋装史、服飾を中心としたファッション(広く流行一般を指す)文化史を研究している。ファッションビジネス史も視野に入れており、ファッションデザイナーやブランド企業の研究にも関心を持っている。また衣生活を中心とした女性の暮らしに関する聞き書き調査も行っている。布の性質を生かしたすぐれた生活デザインとしての布文化にも注目している。

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
准教授	フジキ ヨウスケ 藤木 庸介	建築設計 建築計画 都市計画 文化遺産観光	住環境デザイン特論B	人が暮らす地域には、それぞれに生業や習俗・習慣が存在し、こうした生活上の背景によって、各地域に特有の伝統的な居住文化が形成されている。一方、世界的なグローバル化の進行に関連して、こうした地域に特有の伝統的居住文化は希薄化、あるいは消失する傾向にあり、当該居住文化の維持・保全を行う視点から、喫緊の対応が求められている。以上から、各地域に暮らす人々が、自らが持つ伝統的居住文化を観光資源とし、自らによる経済活動を行い、且つ当該伝統的居住文化の維持・保全を行う事を目的とする「自律的観光」の構築に向けて、各地域における現地調査を主な手法とし、各種関連研究を進めている。

【健康栄養論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	研究内容
教授	ヤノ ミヒロ 矢野 仁康	病態栄養学	生活習慣病の発症と進行を防ぐためには、病気と栄養の関係を明らかにし、栄養の面から疾病の予防や治療に取り組むことが不可欠となる。研究では、各種の食品成分が有する癌細胞に対する増殖抑制効果を分子レベルで明らかにする事で、新たな抗癌剤開発の構造基盤のヒントに繋がる様な研究を目指している。また、癌幹細胞を標的とした研究も行っており、実際の癌の浸潤・転移・再発の予防に向けた応用研究にも取り組んでいる。
教授	ナカイ ナオヤ 中井 直也	運動栄養学	運動と栄養が生体に及ぼす影響を細胞レベルで解析することによって、健康の維持増進に好ましい運動と栄養摂取法の科学的根拠を明らかにする研究を行っている。①骨格筋の収縮活動に伴って発生するメカニカルストレスが骨格筋の肥大や筋持久力を向上させるメカニズムの解明②アミノ酸特に分岐鎖アミノ酸の生理機能の解明
教授	タツミ サワコ 辰巳 佐和子	臨床栄養学	臨床栄養学研究において、個々の栄養素の挙動を基礎として科学的な根拠を提示し、患者治療に発展させることが重要である。1) 基礎研究として、疾患モデル動物を用い栄養代謝調節機構の解明 2) 基礎研究の成果を基盤とした、栄養管理法の開発研究を行っている。「研究対象テーマ」①多臓器にわたるミネラル代謝と慢性腎臓病・骨粗鬆症予防研究 ②健康寿命延伸を目指した抗老化に関わる栄養代謝研究 ③栄養代謝の日内リズムを考慮した栄養管理法の開発
教授	フクワタリ ツトム 福渡 努	基礎栄養学	食素材、食品成分、栄養素など食品に関する研究を通じて、栄養学の理論・実践に寄与することを目指している。特に、ビタミンやアミノ酸などの栄養素とヒトの生理機能との間に成立する複雑な相互関係を解明するために、以下の研究に取り組んでいる。①アミノ酸代謝調節による脳機能の保護および制御 ②食品中の栄養素の生体有効性および栄養状態の評価
准教授	ヒロセ ジュンコ 廣瀬 潤子	栄養教育学	急速な社会環境・生活構造の変化や健康に対する価値観が多様化した現状において、生涯を通じた健康づくりの啓発・普及のためには、それぞれのライフステージにおける健康に関する諸要因の解明と教育介入が必要である。妊娠・授乳期の母子および成人期・高齢期を中心に、現代の食環境にマッチした栄養教育方法の確立を目指す。
准教授	サノ ミツエ 佐野 光枝	食品栄養学	食餌を構成する栄養組成の違いが生体（ヒトやラット）に与える影響について、分析化学や分子生物学の手法を用いて研究を進めている。特に、妊娠中の食餌内容によって羊水や胎児の血液中の栄養素由来成分濃度がどのように変化するか、胎児のエピゲノムに与える影響など DOHaD 仮説に注目して研究している。

【人間関係論研究部門】

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
教授	マツシマ ヒデアキ 松嶋 秀明	臨床心理学 発達臨床学	フィールド心理学特講	人間の発達、とくに心理的な障害からの回復過程に興味がある。なかでも、これまでともすれば軽視されてきた、社会文化一歴史的な文脈の与える影響を重視している。最近、発達上の心理的問題の一つである非行・不登校問題に興味をもっている。そのため小・中学校におけるアクションリサーチを行っている。またこうしたテーマと関わって、質的な研究の方法論の整備にも関心がある。
教授	ウエノ アリ 上野 有理	比較認知発達 科学	比較行動論特講	「他の動物と同様、ヒトは進化の産物である」という視点に基づいてヒトの行動を理解するため、ヒトを含めた霊長類数種の行動比較をおこなってきた。とくに食行動の発達に関心を持ち、味覚や、食事場面における母子間コミュニケーション、他者の情動理解の発達をテーマに研究を進めている。離乳期から就学前の時期に焦点をあてており、乳幼児の養育支援のあり方についても検討していきたいと考えている。
教授	マルヤマ マサオ 丸山 真央	地域・都市社会学 政治社会学 社会調査	比較社会文化論特講	開発主義国家の再編とネオリベリズムの時代の日本の地域・都市ガバナンスをテーマとして、主に社会学の視点と方法で、以下の課題を追究している。①市町村合併・自治体改革と地域ガバナンス。②グローバリゼーションと日本都市の構造再編。③ネオリベラル・ガバナンスと社会運動／市民活動、特にNPOなど市民社会組織の関係。④社会調査データによるネオリベリズムのイデオロギー分析。
准教授	キムラ ユタカ 木村 裕	教育学 教育方法学	教育学特講	現在の主たる研究課題は、学校教育の場における開発教育、グローバル教育、ならびに持続可能な開発のための教育(ESD)のカリキュラム編成、授業づくり、教育評価のあり方に関するものである。そこでは、理論が実践にどのように反映されるのか、また、実践の様相をふまえると理論はどのように修正できるのかというかたちで、理論と実践の往還を意識しながら研究を進めている。 さらに、「目標-内容-方法-評価」の一貫性を意識した授業づくりのあり方についての研究(学校現場の先生方との共同研究も含む)や学力調査の分析なども行っている。
准教授	スギウラ ユカリ 杉浦 由香里	教育学 教育史	教育学特講	地方教育行政の歴史研究に取り組んでいる。特に、近代日本における地方教育行政の再編過程に焦点をあてて、いわゆる教育行政の諸概念すなわち教育行政の独立と教育の専門性および民意反映の必要性等が各府県の具体的な施策形成過程においてどのように問われつつあったのかを歴史的に分析している。また、学校と地域社会との関係に着目し、地域の教育要求と学校の運営基盤についての歴史研究にも取り組んでいる。
准教授	オオノ ミツアキ 大野 光明	歴史社会学 社会運動研究	社会学特講	戦後日本の社会運動について研究をおこなっている。特に沖縄をはじめとする基地・軍隊の集中する地域において、いかなる地域住民運動が展開されたのかについて調査を進めてきた。そして、人びとの営みが、ときに、一地域・一国家内部にはおさまらず、国境や人種、民族などの境界線を対象化し、越えていこうとした越境的なダイナミズムに着目している。
准教授	ハラ ミキ 原 未来	教育学 青年期教育	教育学特講	若者の移行過程に関する調査研究をおこなっている。なかでも、不安定な仕事を転々とする非正規雇用の若者や、学校をドロップアウトした若者、「ニート」「ひきこもり」状態にある若者たちの様相に関心がある。若者支援の現場に入り込み、日々の若者たちの変化に立ち会いながら、これらの成長発達を支える実践要件とはいかなるものか、実践現場との協同的模索をおこなっている。
講師	ナカムラ ヨシタカ 中村 好孝	社会学 福祉社会学	社会学特講	1. 戦後アメリカの社会学者ミルズを中心とした社会学史研究。学者でない人に対して社会学は何をできるのだろうか。2. 現代社会の臨床的な諸問題の調査研究。これまでは社会的ひきこもりのフィールドワークを中心に調査を行ってきた。3. 精神障害者福祉の支援現場との関わりから福祉について学んでいる。

職名	担当教員	専門分野	担当科目 (前期課程)	研究内容
講師	ゴトウ タカユキ 後藤 崇志	社会心理学 教育心理学 認知心理学	行動発達論特講	人の主体的なふるまいに関わる心の仕組みに関心を持っている。具体的には、動機づけ・感情・意思決定等に関わる心理概念の研究を通じて、主体的なふるまいが実現されるメカニズムを明らかにしたいと考えている。また、パーソナリティ発達や社会化のプロセスにも関心があり、個人の価値や認知処理への社会的影響についても明らかにしたいと考えている。心理実験や質問紙調査、実践研究等の多様なアプローチから心の仕組みを明らかにし、社会・教育の改善に活かす知見の創出を目指している。



滋賀県立大学

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500
TEL 0749-28-8217・8243 FAX 0749-28-8472
ホームページアドレス <http://www.usp.ac.jp/>
E-mail: nyushi@office.usp.ac.jp

